

ローマ人への手紙 第10章 15節

「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりのです。『良いことの知らせを伝える人びとの足は、なんとりっぱでしょう。』」

今日は土砂降りの中の遠出であった。バケツをひっくり返すような雨とは今日のような降り方のことだ。道路のところどころには水が溜まり、行き交う車が互いに滝のように水をはねあげ合う。一瞬視界が閉ざされるほどの水しぶきである。橋にかかると、満杯になった流れが不気味なほどの勢いで濁流となっている。

この雨の中、前方からオートバイを走らせる郵便局員が見えた。定例の郵便物の配達のために走っている。春夏秋冬、雨嵐に違わず職務を忠実に全うする姿は感動ものだ。仕事だからと言えばその通りだ。一人の便りを他の人に届ける。文面は露知らないが、手紙を交換する者たちには喜びとなる。

土砂降りのなか車を走らす者も郵便屋さんと同じ。待つ仲間達のところへ、良い知らせを届ける。定められた時と場所にひたすら向かう。郵便さんと異なる点がある。それは、待つ仲間へ届ける中身を届け手自身がわかっていることだ。届けようとしている者に届いた良い知らせを仲間と共有する。良い知らせが仲間へ届けたいからとなる。

2022年7月26日